

V 調査のまとめ

1. 吉ヶ谷式土器をめぐる問題

今回の杉の木遺跡第4次調査では、弥生時代後期の住居跡10軒、土壇3基、溝跡1条が検出された。出土した土器は岩鼻式土器、吉ヶ谷式土器を主とし、他地域の土器を若干含む。ここでは、量的に多い吉ヶ谷式土器を中心にやや詳しくみていきたい。

(1) 研究史

吉ヶ谷式土器は、1961(昭和36)年に調査された東松山市吉ヶ谷遺跡の住居跡出土遺物を基に認識されるようになったものである(金井塚1965)。報文中では、吉ヶ谷式土器という名称は用いられていないが、南関東地方の久ヶ原式とは明らかに違う土器と述べていることから独自の型式として認識されていたようである。

その後、吉ヶ谷式土器は櫛描文を施文する岩鼻式土器との関係で議論がおこなわれる。論点は、主に編年的位置づけを問題としていた。二つの土器型式を先後関係あるいは、併行関係に考えるかを問題としていた。

1982年に石岡憲雄、柿沼幹夫氏により、吉ヶ谷式土器の細分案が提示され今日的議論の出発点となった(石岡1982、柿沼1982)。柿沼氏は甕を主に取り上げ器形、輪積痕の有無、下半部の整形、縄文の施文状況をもとに分類をおこない、3時期4細分した。同様に、壺・高坏についても分類をおこない、各時期の特徴を抽出している。その後共伴土器をもとに南関東地方の併行関係について述べている。

柿沼氏の論文は従来、一括りに考えられていた吉ヶ谷式土器を細かに分類することにより、細分をおこない時間幅が存在することを述べ、その後の論文、報告書に大きな影響を与えた。

その後の研究は、吉ヶ谷式土器の系譜、成立時期について議論がおこなわれる。系譜については、多くの人が帯状に縄文を施文する特徴や耳状の貼り付

け文をもつことから宮ノ台式土器に求めている(柿沼1982、泉谷1982)。

そのような中で、中島 宏氏は池上遺跡の報告書で縄文を全面に施す土器群(池上4類)を吉ヶ谷式の祖形としている(中島1984)。富田和夫・中村倉司氏も同様の意見を述べている(富田・中村1986)。柿沼氏は、池上4類と吉ヶ谷式土器との縄文の撚りの傾向を調べ、池上4類ではLRが多く、吉ヶ谷式ではRLが多いことから両者の断絶を認め、直接の系譜関係として捉えられないとして慎重な態度をとっている(柿沼ほか1989)。

また、柿沼氏は系譜問題に直接絡む問題であるが、吉ヶ谷式土器の開始時期を後期中頃以降に変更する意見を提出した(柿沼1994)。この点に関しては小出輝雄氏より反論がだされている(小出1996)。

佐藤康二氏は高坏口縁部の分析を通して吉ヶ谷式の高段階の土器の抽出を試みている(佐藤1997)。

いずれにしろ、吉ヶ谷式土器系譜、開始時期を考察するにあたり、柿沼氏がおこなったように土器の分類をおこない、その後に問題についてアプローチしていく必要がある。ここでは出土土器の分類をおこないその問題点や特徴について述べ、吉ヶ谷式土器の分布範囲を定め、その祖形等の問題に見通しを述べてみたい。

(2) 出土土器の分類

今回の調査で出土した吉ヶ谷式の器種は壺・甕・高坏・無頸壺・甑・器台である。出土土器量が多いが、遺構に伴わないものも多い。また、破片資料を中心とするため器形全体が推定できるものは少ない。ここでは、出土量の多い甕・壺・高坏について分類をおこなってみたい(第109図)。

a. 甕の分類

甕は概観してみると、胴部の最大径以上を中心に

文様を施文する。ここでは、破片資料も多いことから口唇部・口縁部から胴部上半に別けて分類する。胴部下半についてはハケ調整、ナデ調整がみられる。吉ヶ谷式土器の細分をおこなった柿沼氏は、器形及び胴部下半の調整技法も細分の大きな基準にしている（柿沼 1982）。しかし、前述のように今回の出土資料は破片資料が多いことから、器形・胴部下半については、今回は問題としない。

口唇部

- 1 類 縄文を施文するもの。(1)
- 2 a 類 ヘラ状工具によりキザミを施す。(5・6)
- 2 b 類 木口状工具によりキザミを施す。(2～4)
- 3 類 無文のもの。

口縁部～胴部上半

輪積痕の有無により大きく二つに別けることができる。更に縄文の施文方法により細分が可能である。

- 1 a 類 輪積痕なし。縄文を器面の下から上に横位施文する。(4)
- 1 b 類 輪積痕なし。縄文を器面の上から下に横位施文する。
- 2 a 類 輪積痕をもつ。段差の明瞭な輪積痕上に輪積痕の幅に合わせて縄文を器面の下から上に横位施文する。(3・5)
- 2 b 類 輪積痕をもつ。段差のない輪積痕上に輪積痕の幅に関係なく縄文を施文する。
(1・2・6)

また、輪積痕の有無に関わらず、口縁部直下に幅狭な無文帯をもつものがみられる。この無文帯は、縄文を施文後に強く横ナデすることにより作り出されている。以下、これを幅狭な無文帯と呼ぶことにする。

今回出土の輪積痕をもつ甕は、概ね輪積痕の範囲にのみ縄文を施文している。しかし、S X 1 出土例（第 30 図 13）のように輪積痕の範囲を超えて縄文を施文しているものもある。類例としては、熊谷市玉太岡遺跡第 14 号住居跡（高崎 1990）、深谷市四反歩遺跡南地区第 4 号住居跡（金子 1993）出土土器が挙

げられる。今回は、この土器を分類項目として取り上げなかったが、今後、一つの分類項目として考えてく必要があるかもしれない。

b. 壺の分類

甕と同様に胴部下半は文様を施文しない。ここでは口縁部・頸部・胴部上半に分けて分類をおこなう。

口縁部

- 1 類 輪積痕が 1 段のもの。折り返し口縁状のもの（段差のあるものと、ないものとが存在する）。(7～10)
- 2 類 段差のある輪積痕を 2 から 3 段作るもの。
(11・12)
- 3 類 段差のある輪積痕を 3 段以上作るもの。
(13・14)

これらは、それぞれ、輪積痕上に縄文を施文するもの (a)、キザミを施すもの (b)、縄文を施文し、キザミをもつもの (c)、無文のもの (d) に細別できる。

頸部

概ね無文帯となるが、耳がつくものも認められる。

胴部上半

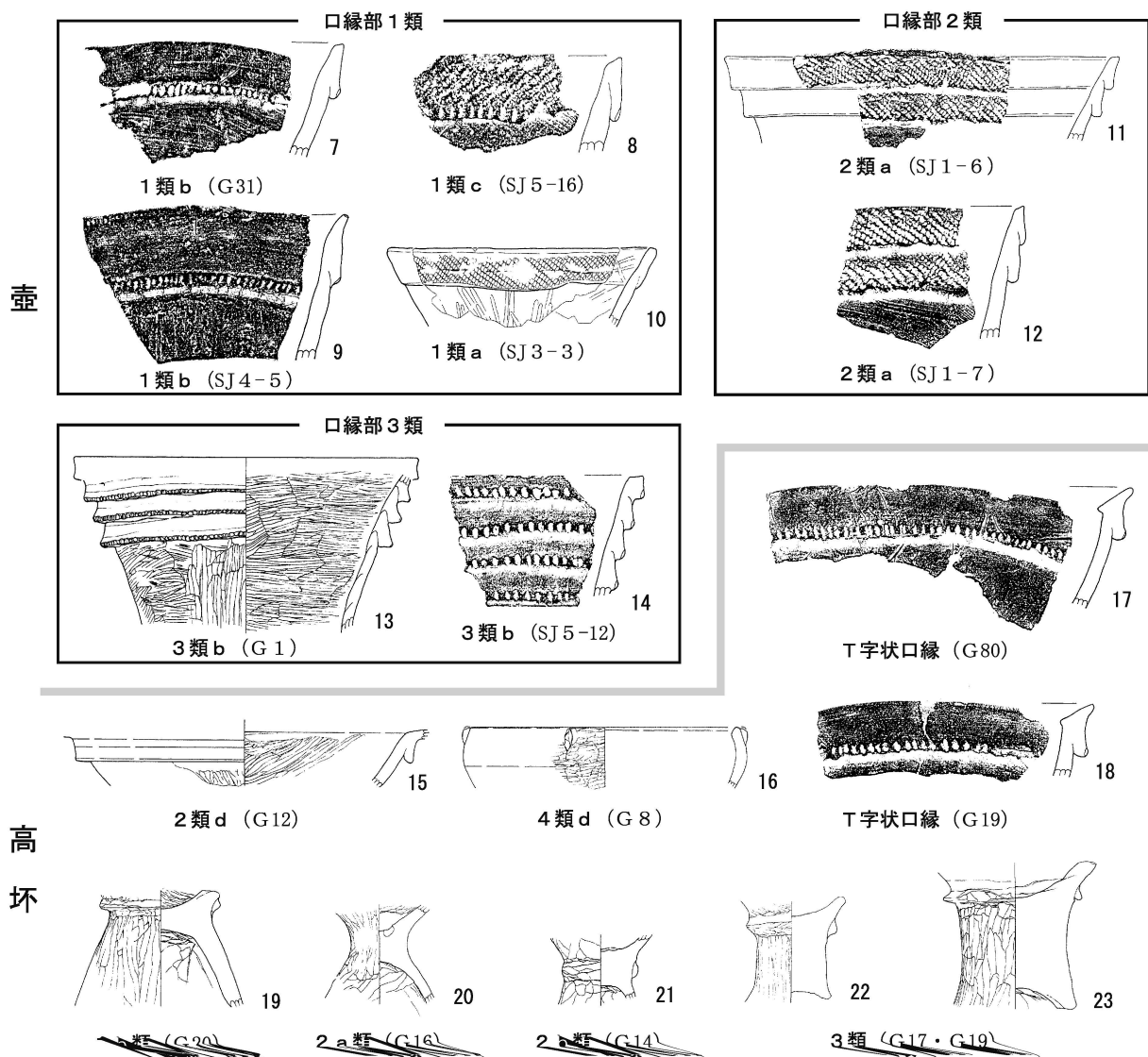
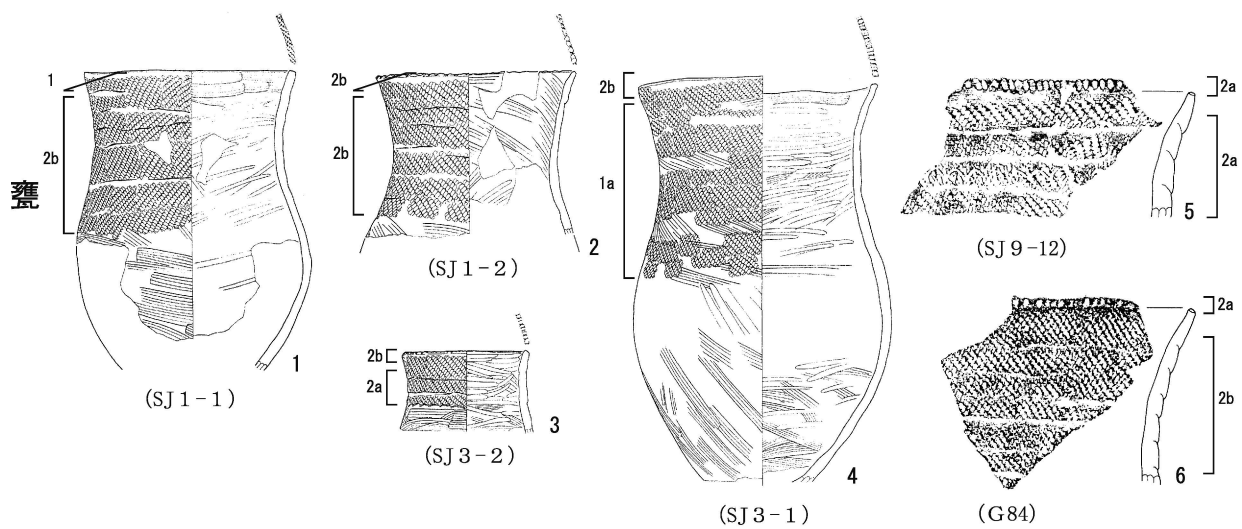
- 1 類 縄文帯が 1 帯施文される。
- 2 類 縄文が 2 から 3 帯施文される。

1 類については、縄文の帯が幅広に施文されるものが他の遺跡で認められる。杉の木遺跡では、破片資料のためか明確に幅広のものは確認できなかった。

c. 高坏の分類

高坏の口縁部装飾は壺と共通するので、ここではその分類に準ずるものとする。ただし、壺では認められなかった単純口縁のものが認められる（第 109 図 16）。以下これを 4 類とする。同様に壺には認められなかったが、口縁部に縦長の貼り付け文がつくものがある。

また、壺との相違点として特徴的な口唇部形態が認められる。第 109 図 17・18 のように内傾する端部が内外方向に短く伸び、T 字状の形態をなすものである。ここでは T 字状の口縁部と仮称する。



第109図 吉ヶ谷式土器の分類

坏部の形態については、内湾気味に立ち上がるものが多い。ただ、第40図12のような内湾度が緩やかなものも認められる。

接合部から脚部

- 1 a 類 坏部と脚部の接合部分の厚さが薄く、接合部に突帯が認められないもの。
- 1 b 類 坏部と脚部の接合部分の厚さが薄く、接合部に突帯がつくもの。(19)
- 2 a 類 坏部と脚部の接合部分の厚さが厚く、接合部に突帯が認められないもの。(20)
- 2 b 類 坏部と脚部の接合部分の厚さが厚く、接合部に突帯がつくもの。(21)
- 3 類 中実の柱状脚状のもので、突帯がつくもの。(22・23)

(3) 出土土器の特徴と位置づけ

以上のように杉の木遺跡出土の吉ヶ谷式土器を分類した。吉ヶ谷式では、今回確認されなかった特徴をもつ土器も存在する。出土土器の編年の位置や特徴を考えるため、若干の比較をおこなってみる。

a. 編年の位置づけ

滑川町船川遺跡第3号住居跡(金井塚・高柳1987)、東松山市観音寺遺跡第3次調査第4号方形周溝墓(宮島1995)出土例のように、輪積痕をもたず頸部の括れ部を中心に縄文を施文する甕がある。船川遺跡では、口縁部から胴部上半に縄文を施文する広口壺が伴っている(註1)。しかし、他は底部破片のみであり詳しい時期はこれだけでは判断できない。観音寺遺跡では方形周溝墓の溝中からであるが、輪積痕が4から14段ある甕が伴い、柿沼編年のI期の指標となる。

これらのことから、数は少ないが輪積痕をもたず頸部にのみ縄文を施文する土器群は、吉ヶ谷式の古段階或いはそれに先行する土器群の指標となろう。前述のように杉の木遺跡では認められないことから、本遺跡の時期を考える上で重要な示唆を与えるものであろう。

壺では口縁部上端、下端の両方にキザミを施す土器は第21図5を除き認められていない。また、単純口縁の壺もみられなかった。口縁部の上端と下端の両方にキザミを施す土器は、玉太岡遺跡で数多く認められる(高崎1990)。时期的には柿沼編年のI期に多いが、やや後まで残るようである。単純口縁の壺は吉ヶ谷式では少数であるが、各時期に一定量認められる。破片資料のため甕と誤認した場合も考えられるが、地域的な特徴として捉えておきたい。

T字状の口縁部形態をもつ高坏については、佐藤氏が高坏の口縁部上位から端部形態について分類した際、「1の亜種形態」として捉えたものと同様である。佐藤氏も述べるように出土量は極少数である。他時期の遺構からであるが、駒堀遺跡古墳時代第1号住居跡から出土している(栗原ほか1973)。他地域の高坏の口縁部形態とも見比べてみても特異な例であり、その系譜、発生時期については不明な点が多い。今後の課題となろう。

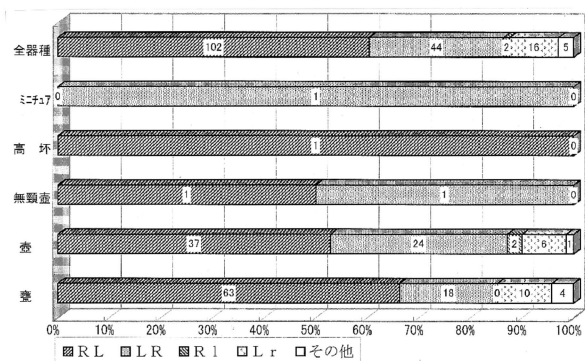
出土土器の編年の位置については、積極的根拠は乏しいが、柿沼編年II期の中にほぼ収まると考えられる。

b. 縄文施文の特徴

吉ヶ谷式土器の縄文については、その特徴については柿沼氏が南関東の土器群に比べ目の粗いことを特徴として述べたことがあった(柿沼1982)。その後、磯崎一氏は、深谷市白草遺跡の報告の中で具体的に縄文原体について言及され、0段多条、多くは0段3条の原体であることを述べている(磯崎1992)。また、柿沼氏は、前述のように吉ヶ谷式土器の撚りの傾向を調べている(柿沼1989)。

今回の観察の結果も同様に0段3条の原体が主なものである。一方、撚りの傾向については、第110図に示すように、壺・甕においてはRLがLRより多い結果となった。また無節においてもLrがRlより多いことが見て取れる。これは、RLの前段の撚りはLrであることから首肯できる。

その他とした縄の中には自縄結節のものがみられ



第110図 縄文原体の構成比率

る(第20図13)。器形や胴部下半の調整技法から吉ヶ谷式と思われる。残念ながら胴部上半を欠く為どのような文様構成になるかは不明である。ただ、吉ヶ谷式では従来知られてなかったものであり、南関東系土器との関係を考える上で重要であろう。

(4) 分布について

現在見つかった吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡は第111図に示したとおりで、比企丘陵及び松山台地周辺に分布の中心がある。分布の南限は、川越市霞ヶ関遺跡、上組遺跡、女堀遺跡の小畔川右岸の遺跡である。北限は、児玉郡周辺であるが、群馬県地方の樽式土器との分布の境界が不明確である。

小畔川以南では、武蔵野台地上の富士見市南通り遺跡、和光市花ノ木遺跡や大宮台地上の戸田市鍛冶谷・新田口遺跡、さいたま市下野田稲荷原遺跡などから出土している。しかし、あくまでも南関東系の土器を主体とする中に客体的に存在し、吉ヶ谷式土器が主体となる遺構及び遺跡は検出されていない。

県外の吉ヶ谷式土器については、浜田晋介・宮川和也両氏により、52遺跡が集成されている(浜田・宮川2003)。遺跡により出土数の多寡はあるがいずれも客体的な出土であり、概ね北武蔵野台地、大宮台地と状況は同じである。

また、現在の荒川以北の妻沼低地で吉ヶ谷式土器及びその集落跡が検出されたことは重要であろう。深谷市明戸東遺跡では住居跡及び小竪穴が16軒、土壌が6基検出されて本格的な集落が営まれていた

(儀崎1989)。五領期の土器も検出されていることから弥生時代後期後半から古墳時代前期に継続した集落であることも分かっている。低地の開発や赤城山南麓に分布する赤井戸式土器と関係を考える上で注目される。

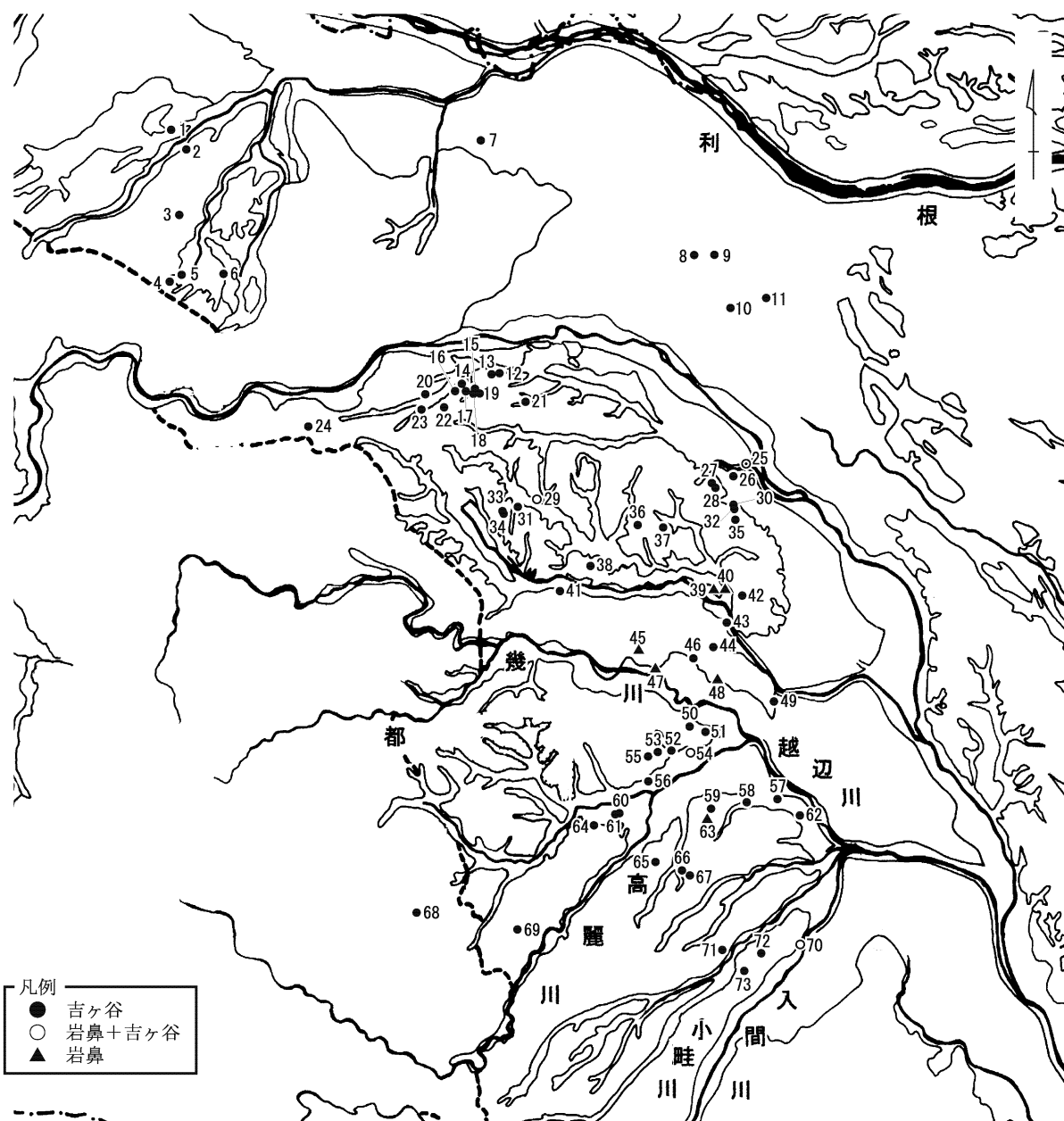
吉ヶ谷式土器の分布範囲では遺跡調査の多寡の問題もあるが遺跡が集中する地点がいくつかみられる。即ち、荒川の支流、吉野川左岸の江南台地上、和田吉野川沿いの台地、滑川右岸の比企丘陵上、杉の木遺跡が位置する松山台地縁辺部である。これらは、吉ヶ谷式期の生業などを考える上で重要であろう。

(5) 今後の課題

以上のように、出土土器の分類とその特徴を述べ、吉ヶ谷式土器の分布についてみてきた。もとより今回の調査では、吉ヶ谷式土器の編年を云々することはできないが、若干の問題点が指摘できるであろう。

今回の調査で、甕において輪積痕があるものとなしいものが同一遺構内で出土している。従来、輪積痕の有無は吉ヶ谷式土器の編年的位置を決める上で重要な指標であった。しかし、前述のように、船川遺跡や観音寺遺跡の例から輪積痕のない甕が古くから存在することも確かである。このことは輪積痕のない甕はそれ自体で一つの系統で変化するかもしれない。しかし、このことが直ちに池上4類をもって吉ヶ谷式の祖型とするということを意味するものではない。現状では、北島式を間に挟んでもそのヒアタスを埋めることはできない。また、甕の分類で述べたように、輪積痕の有無に関わらず口縁部直下を強く横ナデする土器がある。これらの技法は、岩鼻式の甕によくみられる技法である。今後その影響を考えていく必要があるだろう。

土器分布の上からも宮ノ台式や池上式とは一部で重なる地域もあるが、異なっている。このことから吉ヶ谷式が宮ノ台式や池上4類から直接系譜を引いているとは言えないであろう。ここでは岩鼻式に後続する土器群として吉ヶ谷式土器を捉



- | | | | | |
|----------|---------|---------|----------|---------|
| 1 大久保山 | 16 円阿弥 | 31 大野田西 | 46 籠田 | 61 広面 |
| 2 村後 | 17 四反歩 | 32 船木 | 47 附川 | 62 木曾免 |
| 3 志度川 | 18 万願寺 | 33 蟹沢 | 48 西浦 | 63 相撲場 |
| 4 羽黒山 | 19 山ノ上 | 34 芳沼入 | 49 下道添 | 64 稻荷前 |
| 5 神明ヶ谷戸 | 20 上本田 | 35 大境 | 50 高坂三番町 | 65 花影 |
| 6 中山 | 21 久保 | 36 新井 | 51 大西 | 66 一天狗 |
| 7 明戸東 | 22 焼谷 | 37 吉ヶ谷 | 52 桜山 | 67 鶴ヶ岡 |
| 8 北島 | 23 上本田前 | 38 大谷 | 53 舞台 | 68 中在家 |
| 9 田谷 | 24 伊勢原 | 39 岩鼻 | 54 杉の木 | 69 新しき村 |
| 10 小敷田 | 25 下田町 | 40 八幡 | 55 根平 | (下中尾) |
| 11 池守 | 26 成願 | 41 屋田 | 56 駒堀 | 70 霞ヶ関 |
| 12 富士山 | 27 玉太岡 | 42 八耕地 | 57 附島 | 71 鶴ヶ丘 |
| 13 姥ヶ沢 | 28 北廓 | 43 観音寺 | 58 勝呂 | 72 女堀 |
| 14 白草 | 29 船川 | 44 五領 | 59 勇福寺 | 73 上組 |
| 15 荷鞍ヶ谷戸 | 30 円山 | 45 雉子山 | 60 中耕 | |

第111図 吉ヶ谷式・岩鼻式土器出土遺跡

えるのが妥当と考える。

以上、杉の木遺跡の土器の分類を通して思うところを述べてきた。従来の議論では、吉ヶ谷式の祖形を求めるにあたり、ごく一部の特徴を問題としてきた観がある。もとより、土器型式はその大きさに違いはあろうが、先行する型式からの変化や他地域からの影響を受け独自のものとなったときに我々が認識できるものと考えられる。このことから一つの要素をもってその影響を考えるのは問題が残るであ

ろう。多方面からの影響があつてしかるべきである。今後、吉ヶ谷式土器の型式内容をより豊かにするためにはこのような視点に立ち、細かな分類を行いその関係を考えていく必要がある。

(宅間清公)

註

(1) 報告書では台付甕としているが、ここでは広口壺とした。

2. 毛塚古墳群の提起する問題

(1) はじめに

今回の杉の木遺跡第4次調査及び試掘調査によって、4基の古墳跡(毛塚28・32・33・34号墳)の具体的な内容が明らかとなった。今まで諏訪山古墳群や高坂古墳群の影に隠れ、正当な評価をうけていなかった毛塚古墳群について、今回の調査成果は古墳群の形成過程の把握、桜山窯跡群との需給関係の解明、埴輪棺にみられる副次的埋葬施設のあり方など、多岐にわたる問題について重要な手がかりを与えてくれた。

(2) 古墳跡出土土器について

古墳跡から出土した土器をもとに各古墳の築造年代を中心に検討する。

a. 編年的位置づけ

毛塚32・33号墳の2基から所謂「比企型坏」が出土している。比企型坏に関しては水口由紀子、尾形則敏の両氏によって、精度の高い相対編年が組み立てられている(水口1989、尾形1999)。ここではそれらの成果に照らしながら出土土器の編年的位置づけについて検討する。

毛塚33号墳からは、法量の異なる大小の坏が出土している(第61図1・2)。1は口径14.3cm、器高5.8cmの深身で、口唇部が長く外反し、赤彩のな

いものである。2は口径12.8cm、器高4.6cmのやや小振りのもので、口唇部が短く外反し、赤彩が施されている。このうち2は、水口編年Ⅰ段階第2・3小期、尾形編年Ⅱ期に位置づけられる。年代は、水口Ⅰ段階が5世紀末～6世紀前半に比定され、第2・3小期はその後半にあたる。また、尾形Ⅱ段階の年代は6世紀1/5で、須恵器型式のMT15併行期に比定されている。これらから毛塚33号墳の築造年代に関して、6世紀前葉を中心とする時期に捉えておきたい。

周辺では、赤彩された半球形坏と須恵器坏身模倣坏を出土した諏訪山5号墳(金井塚ほか1970)や、半球形坏と内斜口縁坏を出土した代正寺11号墳(鈴木1991)、TK23型式の須恵器高坏と須恵器坏身模倣坏を出土した下道添1号墳(坂野1987)などが、先行段階の5世紀末葉に位置づけられる。比企型坏を出土した古墳では、さいたま市白楯宮腰4号墳(岩田1998)が最古相を示す。須恵器蓋坏を模倣した模倣坏と比企型坏が共伴しており、6世紀初頭を中心とする時期に比定される。また、帆立貝式古墳の岩鼻2号墳(宮島・江原1989)や、さいたま市側ヶ谷戸11号墳(石原2002)からも比企型坏が出土している。時期的には毛塚33号墳に後続する6世紀中葉段階であろう。